

# ハイデガーと宗教

浅野 章

日本大学大学院総合社会情報研究科

## Heidegger and Religion

ASANO Akira

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

Is Martin Heidegger (1889-976) an atheist? Some ones say “Yes”, some others “No”, and the rests might hold back their answers. Certainly, that’s the sort of question one would expect to hear from Heidegger himself. After publishing *Was ist Metaphysik? (What is Metaphysics?)*, his inauguration lecture at the University of Freiburg in 1929, Heidegger was regarded as a nihilist. Because the theme of nothing (no-thing) runs throughout this work. He rejects it. There is the concept of Nothing in union with Being, which might give basis in reason or worship. Heidegger’s impulse has inference on theology and philosophy of religion, and he himself, too, hopes there may be a God. This paper deals with the relations between Heidegger and religion from the point of view his life and thought.

---

### 1. はじめに

ハイデガーと宗教との関わりは微妙である。微妙であるだけにまた研究の興味をそそるテーマともなる。端的にこれを表明すると、ハイデガーは無神論者か、という問いとなる。肯定と否定、いずれの主張も可能であり、いずれとも決し難いところに微妙という評言の意味がある。無神論の主張者といわれるのは、『形而上学とは何か』（フライブルク大学就任講義）において無を主題として論考していることによる。無は有と密接にかかわり、有の現象のうちには無は不可欠である。より根源的には理性と信仰の基礎となるものである。知と信の問題である。ニヒリズムは最高価値すなわち神の否定である。無の考察者であるハイデガーは、単なるニヒリズムの主張者であるとみなされることを拒否する。ハイデガーの思想は神学あるいは宗教哲学に大きな影響を与えている。さらに神なるものの救いを説く。ハイデガーと宗教とのかかわりの微妙なところでもある。ハイデガーその人に問うことによって、すなわち、ハイデガーの人と思想に即して、詳細とは行かず、瞥見するに過ぎないが、困難な課題への糸口を探ってみることとしたい。

### 2. 生涯と宗教

マルチン・ハイデガー (Martin Heidegger) は、1889年9月26日(木)、スイス国境に近く、シュヴァルツバルトに近いドイツ西南部シュヴァーベン・アレマニアン地方にあるメスキルヒ (Messkirch) という片田舎 (当時人口 2000 人) において、フリードリヒ・ハイデガーを父 (38 歳) とし、ヨハネス・ケンプ (旧姓) を母 (31 歳) として出生。父はメスキルヒの教会管理人 (Messner) で樽職人でもあった。

地元の小学校から中学校を経て、ボーデン湖畔にあるハインリッヒ・ズーソ高等学校へ進む。幼少時代は各種のスポーツに興ずる健康な日々を送った。ここで注目しておきたいことは、生育環境、家庭の雰囲気を含めて、生家を取り囲む人為的並びに自然的な環境である。これらの環境がおそらく極めて宗教的であったことは容易に想像することができる。樽づくりとは言うが棺桶ではなかったかとも言われている。教会の鐘を鳴らすのは日常の仕事であった。

この地方、つまりハイデガーの生まれ育ったアレマニアンは隣のシュヴァーベンがプロテスタントであるのに比し、古くからのカトリックであり古風な雰囲気のうちにあった。またフリードリヒ・ハイデガ

一の友人であるグレーバー司祭の存在はハイデガーの生涯を考えていく上で無視することのできない重要性を持ってくる。ズーツ高校は古典語系統の学校であり、将来の聖職者への予備教育を授けることが期待されていたものとも推察される<sup>1</sup>。

1903年、ハイデガーはボーデン湖畔の高校からフライブルクのベルトホルト高校に転校し1909年卒業。イエズス会入会を決意し、オーストリーのフルアルベルク地方所在の修道士修練期用寄宿舎新入生名簿に同年9月末登録したが、入所後一月足らずで監督より除籍を命ぜられる。健康上修練に耐えられないという判定による。ここに一つのハイデガーの生涯における転機が認められる。しかし、なお、聖職者への道を辿るため、直ちに、その年の冬学期、フライブルク大学神学部に入學し、1913年卒業までの丸4年間、フライブルク大学における修学期を送る。

このハイデガー20歳からの4年間の間に修練士除籍に次ぐ一大転機が訪れる。訪れるというは他動的に響くが、1911年に神学部から哲学部への転向は全くハイデガー自身の意思によるものである。

この転向については、もとよりハイデガーの言い分はあり尊重されねばならないが、そのみであると断定できない面も見られる。ハイデガーが理由として記しているのは、卒業論文、教授資格論文に添付してある簡単な履歴のうちにみられるもので、健康上としている。健康上とは言うまでもなく、かの修練士登録からの除籍理由と同じである。断るまでもなく、神学部のみでの履修であれば哲学部でのそれと身体的負担について異なるとは思えない。この点については、修練士の修練とは異なる。ハイデガーの場合は、神学部での履修は将来の聖職者への一階梯に過ぎない。大学卒業後の厳しい生活に堪えることができないという将来の見通しの下になされた判断であり、それに基づく決意である。おそらく高校卒業直後数年間は心臓発作に悩まされることも稀ではなかったのであろう<sup>2</sup>。

しかし、ハイデガーの決意が両親にとって青天の霹靂と受け取られた<sup>3</sup>ことが事実とすれば、ことは単純には運ばないように思われる。率直に語るものが誤解なしに認められるとするならば、両親の期待か

らマルチンの意向は次第に離れていったものと思われる。それは既に高校時代、1908年に、アリストテレス著作集を寮の図書室から借り出したり、翌9年には、カール・ブライヒ『存在について—宗教論要綱—』(1896)を手にしたりしている、などの点に、つまり、哲学に対して関心を持ち始めると、これをさらに追求していこうとしている姿勢のうちに明らかに読み取ることができる。これらが高校時代の出来事であることに注目しておくべきであろう。青年ハイデガーの知的関心に強力な方向付けを与えた一書こそ、アリストテレス哲学についてのブレンターノの学位論文、『アリストテレスにおける存在者の多様な意義について』*Von der mannichfaltigen Bedeutung des Seienden bei Aristoteles* である。

コンラート・グレーバー<sup>4</sup>がハイデガーの才能とおそらくはその関心の深さ、すなわち哲学あるいは思索的探求の旺盛さ、それは青年期特有のものとも見なされるが、並々ならぬものをそこに感得して、高校生に与えるものとしては、高度に専門的である哲学研究者の学位論文を贈ったものと推察される。

しかし、カトリック教会の将来を担って立つ逸材に目をかけた上の贈物であったとすれば、その方向を誤らしめたともいえるであろう。贈った論文の著者がブレンターノ<sup>5</sup>であるという点にも、何か将来に対する奇妙な符合を思わせないとはいえないものがあるかに見える。

もとよりハイデガーとブレンターノとは比較に及ばないほど相違しているといえよう。特にカトリック教会の援助の下に修学期を過ごさなければならなかったハイデガーと名門の出であるブレンターノとは教会にたいするかかわりの点において大いに異なる。おそらくカトリック教会の期待に背く神学部から哲学部への移転にしても、教会の寛容の下に可能であったと看做される。このことはハイデガーの結婚とそれに続く長子の誕生において明白に見取ることができる。この点についても、カトリック教会と鋭く対立して、その圧迫から逃れねばならなかったブレンターノとは著しく異なる。

ボーデン湖畔でハイデガーの詩情をかきたてた風光のうちに、将来の妻となる女性たちと過ごした青春のひと時、このひと時の持つ意味もハイデガーに

おける宗教性を考える上で見逃しえない重要な意義を持っている。この点については後に触れる機会があるろう。

許婚のエリフリーデー家はプロテスタントであった。このためハイデガーは新旧両教会において結婚式を行なった。さらに、長男の出生に伴い、洗礼の問題が持ち上がってくることとなった。カトリック教会の側からすれば当然の申し入れである。しかし、ハイデガーはこれを断る。ここに歴然として、ハイデガーと宗教との関わりを見る。まさに神学部から哲学部への意向の真相が何であったかを、それこそ開示せしめたといつて過言ではなかろう。それは、高校時代から次第に萌してきた知的探究心、まさに哲学する心の決定的に優位に立つことの宣言とも受けとることを可能にするものである。ここに、知的探究心という。しかし、それのみをもってしては十分に意を尽くしたとはいえないであろう。知的探究心に加えて、知における倫理性、まさに知的廉潔をみる<sup>6</sup>。

信仰としての宗教から離れたとは言え、ハイデガーの宗教に対する関心が消失したわけではない。いまや、修学時代を終え、いわば黒板を背にする時代に入ったが、講義の題目について、その間の事情を垣間見ることが可能となる。

1915年、*Venia legendi* の資格を得て直ちに講義を開始（冬学期より私講師として）。19年にフッサールの助手として採用される間での期間において、宗教に深く関わる作品として注目されるのは、シュライエルマッハーに関するものがある<sup>7</sup>。この小品といつても特にそれを意図して記したというのではなく、ハイデガーが親しみをこめて呼んでいるハイデガーの最も古い学生ハインリッヒ・オクスナーにあてた手紙である<sup>8</sup>。シュライエルマッハーの第二講話について現象学の立場から説いている。その素地となっている学的養分は、教授資格論文の準備の過程を通して蓄えられたものである。ハイデガー全集の編集者の驚くほどの資料である。

当面問題とするのは、ハイデガーの関心がシュライエルマッハーに注がれた理由にある。宗教から哲学への転向を見せたその当初の出来事として、シュライエルマッハーが登場してくる、このタイミング

のよさに引かれる。もっとも、この手紙は言ってみれば、ある偶然によって記されたに過ぎないものにはあるが、ハイデガーの生き方としては特色のある必然さを思わせる。

先ず、シュライエルマッハーによって宗教哲学が創始されたという歴史的事情、つまり宗教と哲学との関わりにおいて占めるシュライエルマッハーの位置である。宗教から哲学への移行、哲学から宗教を見直す立場の転換、これらを考えるとき、自らハイデガーとシュライエルマッハーとのかかわりについて関心がもたれる。断るまでもなく、ハイデガーの関心は研究方法にあったであろう。すなわち現象学である。現象学を駆使することによるシュライエルマッハーについての理解である。事実、ハイデガーの目は、聖書について、また教団について、原始キリスト教に遡ってこれを見ていこうとする。それは、プロテスタントの基本線に帰ろうとする研究でもある。もっとも、シュライエルマッハーの第二講話が対象として取り上げられている点にも注意しなければならない。この講話の呼びかけている相手は、いわゆる啓蒙思想に浸りきった知的教養人たちである。この人たちにとって、宗教などというものは時代遅れの啓蒙されていない無知な者共の信奉している、いかがわしいものと看做されていた。と、いうよりむしろ宗教については無関心になってしまっていた。

したがって、教養それも啓蒙時代における知識階層を相手取って宗教についてその意義を説くということは決して容易な業ではない。

シュライエルマッハーの事業が自ら宗教哲学にかかわらざるを得ないことも理解されよう。もっとも、宗教を理論的に説き信仰に導こうという、そのことの故に、シュライエルマッハーが宗教哲学の祖といわれているのではない。むしろ、哲学から宗教独自の立場を鮮明にしようと努めた点に哲学および神学史上におけるシュライエルマッハーの功績が認められる。それは兎も角として、ハイデガーの場合は、むしろ宗教というより、キリスト教よりも、より広い立場、すなわち宇宙論というシュライエルマッハー独自の宗教観に注目したのではないかと思われる。カトリックという伝統的な、その意味で、古風で強固な宗教から、純粋な思考に徹底しようとする哲学、

まさに、その哲学へと、身を翻していく過程において、シュライエルマッハーが介在していた意味には深いものがある。この過程を経て、1919年以來フッサールの助手を務めていたフライブルク大学から、ナトルプの招きにより、マールブルク大学助教授として1923年秋に赴任後、プロテスタントの神学者たちとの交わりを通じてハイデガー独自の真価を発揮していくこととなる。28年までのマールブルク時代の5年間は最も勉強したと後年述懐されている。

ここで、ヘルダーリンとハイデガーとの関わりについて記しておく。ハイデガーと宗教について考えようとする際に、ヘルダーリンを差し置くことはできない。やはり、高等学校時代からヘルダーリンに親しみ、異常な体験もしている。ハイデガーの言葉によれば、まさに「地震に襲われたような衝撃」を受けるほど強烈であった。これは1910年と14年のことでフライブルク大学におけるヘルダーリン体験である<sup>9</sup>。高等学校時代にはレクラム文庫によっている。ヘルダーリンは、ヘーゲル、シェリングと共にチュービンゲンで学んだプロテスタント神学校の出身である。ヘルダーリンのみは詩作を通して宗教と深くかかわる。

さて、マールブルクにおいて注目されるのは、周知のとおりブルトマンに与えた影響である<sup>10</sup>。ブルトマンは聖書解釈に新紀元を画した。いわゆる非神話化である。この聖書解釈にハイデガーの実存分析の影響が見られる。ブルトマンとは聖書研究会を通して親しく交際している<sup>11</sup>。ブルトマンはプロテスタント神学者であり、ハイデガーの転向以後の傾向を示すものとして注目される。もっとも当時のハイデガーの立場に新旧キリスト教の偏りを見ようとするのは適当ではないであろう。つまり、哲学の立場、無前提的に根源に迫ろうとする姿勢を認めなければならぬ。マールブルク時代のハイデガーの宗教的立場は比較的自由であったと思われる。自由神学院での講演などというのも、その学院の名称からして注目させられる<sup>12</sup>。

ハイデガーの転向以後と記したが、マールブルク時代以前の傾向のうちにそれを捉えている本稿に対し、マールブルク時代の内、それもその終わり頃にそれを、と、いうのは神学から哲学（存在論）への

転向を見ようとするのがスタイナーの見方であり、木田元はそれを肯定して記している。「ジョージ・スタイナーがハイデガーの最初の根本的な〈転回〉は『存在と時間』執筆中に起こっており、それは〈神学から存在論への転回〉だと言っているが、これは当たっていると思う。たしかに『存在と時間』やその前後の講義には、神学への言及はほとんど見られない。たまにあっても、それは神学者たちへの皮肉っぽい当てこすりである」<sup>13</sup>。として、「たとえばマールブルク大学での最終稿義（1928年夏学期）にはこんなくだけが見られる」<sup>14</sup>、と述べ、いくつかの言葉、それはハイデガー宗教観を吐露するものとして注目されるのだが、木田は、この点を余り重視していないように見受けられる。というのは、「くどくど述べた」<sup>15</sup>と弁解して、その真意は、哲学と神学とのかわりについてのハイデガーの見解にあるのではなく、ハイデガーの人となり、木田の見るハイデガー観の資料に供している。本稿の当面の目標において、そのねらいに相違があるとはいえ、あえて、ここでハイデガーの宗教を知る上でもっとも適切なハイデガー自身の言葉として、木田と異なった見方に立つ立場から、以下に記しておく<sup>16</sup>。

こんにちまさにこのマールブルクでは、無理やり模造された経験さと結びついて、弁証法の見せかけがとくに肥大している……むしろ無神論という安っぽい非難を受け容れた方がよい……いわゆる存在者レベルでの神への信仰は、結局のところ神を見失うことではなかろうか、真の形而上学者のほうがありきたりの信者や〈教会〉のメンバーや、さらにいかなる宗派に属するものであれ〈神学者たち〉などよりいっそう宗教的である。

これは容易に看過することのできない指摘である。特にハイデガー自身の言葉というのであるから、単なる当てこすりや中傷の域を超えている。ただ目下のところ資料不足と考察の暇がないので追求できないが、容易に察せられるように、バルト<sup>17</sup>などの神学を向こうに回し、ハイデガー自らの宗教観を開き直って見せているところがある。それだけに率直な

ハイデガーの声が聞かれるというものである。無神論を、安っぽい非難として、これを貶め、さらに相手が信仰している神を、存在者レベルとして蔑視している。かかる神は神に値しない。神に値しない神の信仰は神を見失うに至る。真の形而上学者たるハイデガーの方がはるかに宗教的であるという。これほど見事にハイデガーの宗教観を披瀝したものがあろうか。

ハイデガーと宗教について、ハイデガーの生涯の面から注目されるのはやはり死に臨んでの態度、あるいは葬儀のあり方などである。この点について、ハイデガーの場合、かなり明確に伝えられている。

1976年1月14日夜、ヴェルテに葬儀の模様を詳しく指示し、墓所についての希望も述べている<sup>18</sup>。

ヴェルテは司祭でありハイデガーの友人でもあった。ヴェルテの記述によって、ハイデガーの晩年の宗教に関する意向を知ることが出来そうに思われる<sup>19</sup>。確かにハイデガーはキリスト教の信仰者として生涯を閉じなかった。しかし、ヘルダーリンの詩の朗読を含むとはいえ、葬儀のすべてをカトリック教会に委ねて逝ったのである。この間の事情を伝える雄弁な事実は、カトリック教区の墓地に葬られ、その墓標にするされているのが十字架ではなく、八角形の星であることにある。

### 3. 思想

ハイデガーの哲学と宗教とのかかわりについて、思想の面から考えてみる。

#### 3.1 キリスト教

ハイデガーの思想がキリスト教と深く関わっていることは、生国ドイツにおいても、注目されている評論から窺い知ることができる<sup>20</sup>。

「フライブルクのハイデガー教授の実存哲学への努力は、最近広い範囲で大きな賛同を得ている。それもとくに在来のものをきっぱり拒否する仕方ドイツの大学の意味を取り上げた講演によってである」と、学長就任講演にちなんで、ハイデガー哲学の一端を紹介するとともに、キリスト教に対するハイデガーの当時の姿勢を批判する論評を紹介する傍ら、キリスト教に対するハイデガーの明確な態度を

要求して、その回答が待ち望まれているとしているものである。まさに「待ち望まれている」のは、半世紀をはるかに越えている今日においても変わりはない。

これは1934年のことである。学長辞任以前のハイデガーの姿勢を伝える点を考慮しなくてはならない。その意味からいうと第二次大戦後はまた状況が大きく変わったともいえるが、この点、ハイデガーの心境に、と、いうのは、キリスト教に対するハイデガーの考え方に変化が見られるのかどうか、関心がもたれる。これに応える一例は、一人の日本のドイツ文学研究者と交わした貴重な会話が資料として残っている<sup>21</sup>。東京大学の手塚富雄教授がその日本人である。此处で特筆すべきことは、手塚教授の宗教に対する関心の深さである。これがなければ到底ハイデガーの面前に提示できる質問ではなかったであろう。その質問とは、

ヨーロッパに来て、一般生活人の精神的基盤となっているキリスト教の根強さにおどろいています。それらの人たちに信仰が厚いという意味ではありません。それでこれを市民化されたキリスト教と申しましょう。先生はこの市民化されたキリスト教のうちに、今後のヨーロッパ文化の新しい進展をうながしていく力があるとお考えでしょうか。<sup>22</sup>

日本の宗教の現状に憤りを感じている手塚教授の日本との比較の言に、「この間のさいちゅうから、ひんしゅくするようにまゆをよせだしていた」と、手塚教授はハイデガーに問題を切り出したとき、ハイデガーの表情について記している。このような表情は、それ以前には全く見なれなかったものである(特に記されているのではないが)。困惑を思わせる表情のうちにハイデガーとキリスト教とのかかわりについて当時のハイデガーの心境を垣間見る思いがしないわけにはいかない。しかし、ハイデガーの答えはそれを取り払うほど決然たるものがある。その様を教授は次のように記している<sup>23</sup>。

はげしく首をふって言下に答えた。

「それはない。それがあのように誤信しているところに、ドイツの、ヨーロッパの、文化の最大の危機がある。あの因習的な宗教性と自己満足、……。まだしもイタリアの民衆には、生きた信仰の力が残っているがね」。

考えてみれば、かれがこういう答えをするだろことは、当然予期されたのである。しかし彼の言い方には、他のヨーロッパ人にはどうてい見られないと思える強い放電があった。それは発止としていて、小気味よいものであった。文明批評の生きた力がこもっていた。

ここにハイデガーの宗教観が端的に語られている。

「それはない」、という断固たる否定のうちに。しかし、否定して終わりというわけではない。この点を無視すると誤解が生ずる<sup>24</sup>。誤解の余地を与えなかったのは、手塚教授の母国日本に対する当時の現状、といっても、今日と雖も変わりはないが、それは、ヨーロッパのキリスト教に比すべき生活の支柱が、日本にはないということの率直な吐露である。

ハイデガーは応える<sup>25</sup>。

それはね、支えにならない支えがあるように思っただけのより、それがなくことを自覚して苦しんで求めることが、はるかにいいことなんだよ。

確かに記されているように、苦衷を察して、語る相手に対する親愛のこもった言葉である。しかし、同時に、そこには、偽らざるハイデガー自身の感慨を読み取ることができるという過言ではないように思われる。それを端的に示す後年の一言、神のみがわれわれを救うことができる、として要約されるものである。耐え忍び待つことである。

ハイデガーの宗教観、芸術観、つまりハイデガー哲学についてまた文明批評について、うかがい知るには格好の資料である手塚教授との対話の一部を引用して特にハイデガーと宗教との関わりを見てきた<sup>26</sup>。1921年のレーヴィト宛の手紙で「私を創造的な哲学者の規準で諮らないでくれたまえ。……私はい個のキリスト教神学者なのだから」<sup>27</sup>と記す。

ハイデガーの心底には変わる事のない真摯な宗教への関心が牢固として見られるとあってよいのではなかろうか<sup>28</sup>。

### 3.2 ギリシャ思想

余りにも有名な「存在忘却」の発想の根拠となっているのは、断るまでもなく古代ギリシャのソクラテス以前の哲学者である。

ハイデガーが主に採り上げているのは、それらの哲学者のなかでも、アナクシマン드로スとパルメニデスそれにヘラクレイトスである<sup>29</sup>。

思索家パルメニデスは旅をしたとき宿った一人の女神について物語っている。この女神は真理の女神である。ここで注意しなければならないのは、真理と女神は切り離されていない一体であるということである。プラトンの時代以降、「哲学者」と呼ばれる思索家たちを特徴づけるものは、自分の思想を固有の思想からくみ出している点にある。固有の思想とは借り物でない、と解される。ハイデガーの説くところを掲げておく<sup>30</sup>。

この思索家たちが、強調された意味で、まさに「思索家」と呼ばれるのは、彼らがそう思われているとおりに、「自分から」思考し、この思考のうちに自分自身を賭けているからなのである。思索家というものは、自分自身の立てたもろもろの間に、みずから答える。思索家は神の「啓示」を告げるのではない。彼らは女神の「靈感」を伝えるのではない。彼らは固有の洞察を言うのである。

さらに、ハイデガーは「教訓詩」における女神は何を意味しているのか、と、「靈感」と関わりのない女神の性格を知ろうとする。ギリシャ語の「真理」(アレーテア)を語源的に探究する方向へ向けて大きく展開していく。すなわち、ハイデガー言うところの追思考であり、反復であるが、その始元において、神学と哲学は峻別されていたということ、それが、真理という一語において示されることと、その探求自体のうちにハイデガー哲学の性格を読み取れることを可能にしている。もとより、明確にこれを

もって、ハイデガーにおける宗教と哲学の問題が解かれたということではできない。非隠蔽性と訳される「真理」(アレーティア)ではあるが、これが神とかかわってくる性格を持っているので簡単に結論付けられる性格の問題ではない。非は否定であり、否定はその前提なしにはありえない(非覆蔵には覆蔵が前提されている)。

古代ギリシャの神について、これを作詞した詩人の一人がヘルダーリンである。ヘルダーリンの研究をもって知られるハイデガーは、ここにおいて、また神の問題に直面しないわけに行かない。

もつとも、詩人によって詩に歌われた神は、宗教の神とは異なる、と言う見解もある。確かに、キリスト教、それも、プロテスタント系の神学において、啓示は不可欠である<sup>31</sup>。芸術における神は啓示の神とは限らないであろう。それに、ヘルダーリンの詩に表れる神は特定の神とは限らない。また当代において信仰されている神というわけでもない。しかし、単に芸術における神というのでもない。宗教における神であることは紛れもない。ここにハイデガーと宗教とのかかわりについて、ヘルダーリンが注目される所以がある<sup>32</sup>。

さらに、ロゴスについて、実に詳細な考察が、ヘラクレイトスの断片についてなされている。人間はロゴスをもつ動物である、という西洋形而上学の伝統的な概念規定に対し、ロゴスの語源レグイン、拾集と集収すなわち拾収のうちにこの起源を見ようとするハイデガー独自の見解から、一にして一切、という形而上学の根本概念が導きだされていく。

なお、ハイデガーがヘラクレイトスに注目するのは、「暗い人」と呼ばれているこの人について、「この思索家の思索の内には神々のある近さが続んでいる」<sup>33</sup>、としてであり、残されている極めてわずかの資料を基に、「形而上学とキリスト教との交互の関わり合い」<sup>34</sup>を念頭において考察を進めている。

プラトン・アリストテレス以来存在は忘却され、存在者の哲学の風靡するところとなった。アリストテレスが第一哲学として説いた形而上学は、一般存在論と最高存在者を扱う神学よりなっている、ハイデガー言うところの存在 - 神 - 論である。ハイデガーは、無神論であるという非難に対して、ハイデガ

ーに見られる「神のない思考」の方がもつとも真なる神に近いとさえ述べている<sup>35</sup>。神のない思考ということは、神についてあれこれ語ったり書き記したりしないこと、つまり神という大きな存在、絶対、無限に対して小さな人間の頭で思考を弄しないことである。なしうることは只「言葉を語りつつ言わない」*das sagende Nichtsagen* ということ、これが「神に対する本来の態度であるとされる」<sup>36</sup>。

もつとも、このように一応ハイデガーの言葉を借りて述べてはみてもそれが直ちに説明といえるか、ということになると、まさにハイデガー読みを悩ます問題がそこに立ちはだかる。言葉を語りつつ言わない、とはどういうことか。この躓きがまたハイデガー哲学を考えさせる機縁となる。

*Nichtsagen* と、一語で表すところにドイツ語特有の響きと味わいがある。*Sagend*(言いつつ)、といておいて、言わない、というが、これは言うまでもないことである。言うまでもないことを重ねて言っているに過ぎない。*Nichtsagen* は *sagen* が既にあることである。本来否定の働きとはそういうものである。本来否定の働きとはそういうものであろう。*sagen* あつての *nicht* で在る。したがって端的には無言である。沈黙である。しかし、その上でなお、言いつつ *sagend* に拘ってみる。すると、溢れるような言葉が体験されてくるのではないであろうか。それは到底言葉に言い尽くすことはできない。まさに *Nichtsagen* としてより、表現しようのない状態であろう。この間の事情を弁えた上で、思考と信仰について、ハイデガーに即して考えてみると分かりやすいように思われる<sup>37</sup>。

言わないというかかわり方、このかかわり方によって初めて神は「神なる神」として出会われるというのである。言葉にし得るのは「聖なる次元」、さらにそれを掘り下げた「存在」までであつて、そこで言葉は止まる。それから先は沈黙の「飛躍」ということになる<sup>38</sup>。この飛躍、これまたハイデガー一流の表現である。この飛躍こそ相對の世界から絶対への超出を可能にせしめるものである。すなわち、「思考」から「信仰」へは飛躍によって移行する<sup>39</sup>。

ハイデガーと宗教とのかかわりを見ていくに当たって、慎重に検討してみるならば、軽々しくハイデガーの思想を無神論などといえないことに気づくで

あろう。この点において、やはり無神論者と看做され迫害にあったスピノザを思い起こす。死後イヌのように打ち捨てられていたスピノザの名誉回復の際、「おそらくここでこそ、神はもつとも間近に見られたのである」<sup>40</sup>という絶大なる評価が与えられた。もとより、ハイデガーは、「自己原因」としての神を認めなかったが。

ハイデガーの記す神は、神々としての神であり一神教における神に限るものではない。存在忘却の思想が語る古代ギリシャの世界である。ここにヘルダーリンとの結び付きがみられる。ハイデガーの解するヘルダーリンは、あくまでも古代ギリシャ的であり、それを通してキリスト教へと迫る<sup>41</sup>。ヘルダーリンは「聖なる次元」について詩作する。聖なる次元の強調のうちに、ハイデガーにおける宗教への並々ならぬ関心を見て取ることができるであろう。ただし聖なる次元をハイデガー哲学のうちに見出すことはない<sup>42</sup>。まさに「思考するものと詩作するものとは「最もかけはなれた山の上に親しく隣り合っている」<sup>43</sup>のである。

### 3.3 東洋思想・日本の思想

ハイデガーの思想は「無」と深くかかわる。

無の思想はヨーロッパではほとんど関心を持たれることはない。極めて東洋的でありまた当然日本的でもある。無と宗教との関わりは深い。ここにハイデガーと宗教との考察の視点が東洋思想あるいは日本の思想・宗教に向けられる必然性がある。早くからというのはハイデガーの若いころから、日本人のこれまた若い学徒によって、注目されてきたひとつの理由がある。もとよりハイデガーの哲学についてであり直接、宗教についてはない。しかし、哲学と宗教の関わりに密接な関係を感じているのが大方の日本人の傾向ではなかったかとも思われる。その点から、ハイデガーの思想のうちに宗教的なものを読み取ろうとする研究者も少なくはないように見受けられる。

ハイデガーの思想が、日本人にあるいは日本の思想に親縁な感じを与えるのは興味を呼ぶが、ハイデガーもまたそれに劣らず、日本について並々ならぬ関心を抱いている。この間の消息は親しくハイデガ

ーに接した日本人によって伝えられている<sup>44</sup>。

この理由はどこにあるのであろうか。考えられるその一つは、ハイデガーの根源思考である。徹底的に根底を究めようとする、哲学する態度である。その究極するところが「無」ということになる。もつともハイデガーにとって無というのは、存在するものの立場から言われているのであり、それは存在と同じものとされる<sup>45</sup>。が、混同してはなるまい。

無は、『形而上学とは何か』において探求されたが、この書の訳者である大江清志郎は、大乘仏教との関わりを本書のうちに感得し一文を草した<sup>46</sup>。大江のみに限らずハイデガーの思想の無について、あるいは、そこから波及してくる問題の展開、それらはハイデガーの思想に接するものの接し方によって特色ある様相を呈する。

死は無と深くかかわる。『形而上学とは何か』は、『存在と時間』の展開の過程において生まれた作品である。『存在と時間』において、死は極めて大きな構成要素をなしている。また、無は『形而上学とは何か』の主題である。ハイデガーにおいて死と無はともに不安を媒介としている。ここにおいて、死と無とは単なる抽象概念ではなく生に深くかかわる人間存在の、つまり実存の問題として突きつけられている。ここにハイデガーの思想における宗教性を感じ得ることは容易であろう。

「死の哲学」と題して、ハイデガーの「存在の哲学」との対決を試みようとした田辺元の構想は、その意図において同質を思わせながら際立った異質性を強調して注目される。ここに同質とは、ハイデガーの思想に、「死の哲学」の印象を持つからにはほかならない。田辺があえてハイデガー哲学を「死の哲学」とせず「生の存在学」と呼んだのは何故か。

田辺は、ハイデガーから、その教場において、親しく教えを受けた若き日を回想するとともに、次のように述べている<sup>47</sup>。

ただハイデッガー教授に依って教えられた「死の哲学」の方法は、その後の私自身の思索においてさらに徹底を要求することいかんともしがたい。教授もまたその思想を深めて細緻周匝、精妙無比ともいふべき哲学を展開せられた。し



かも死の決断覚悟は依然として教授の哲学における支柱となっているのである。しかし翻って考えてみると、教授の哲学はあくまで存在学であって、死は、存在として自らを実現する生の、自覚に対す標識に止まるから、現実なる死そのものが哲学の契機として、観念实在論的に自覚せられるということはない。単に可能性を表す極限的観念として要請せられるばかりである。

掲出の一文の意味するところは、いろいろな意味において興味を引く。ハイデガーの古希を祝う記念論文集に寄稿する一節であることを思えばなおその感が深い。真理探究における師弟間のあり方も伝えている。この前節にその一例が述べられているが、差し当たっての問題は、ハイデガーにおける「死の哲学」が「生の存在論」とみなされた点にある。引用文中にあるように、田辺元の思索の深まりがその理由である。そこには、無についての田辺の思想の深まりにより、なお無といいながらも絶対無に徹底することのないハイデガーの存在論、いわば死にきっていない死の哲学、なお生の域に留まる存在論とハイデガー哲学がみなされているものと解される。

この田辺によるハイデガー哲学への迫り方が、宗教とのかかわりなしにはありえないところに注目を促したい<sup>48</sup>。

西谷啓治もまたハイデガーのもとで学んだ(1937-39)一人である。田辺がハイデガーに直接接した当時の、ハイデガーの主な関心は既述のように「死の哲学」であったが、西谷が教えを受けたころは、ニーチェの研究に注がれており<sup>49</sup>、当然「ニヒリズム」もその対象であった。西谷はニーチェから青年時代以来ドストエフスキーとともに強い影響を受けていた。留学により西谷のニーチェに対する関心は再燃し、論考「ニーチェのツアラツストラとマイスター・エックハルト」をハイデガーに提出しているといわれる<sup>50</sup>。西谷独自の哲学的立場を確立したとされる『根源的主体性の哲学』の巻頭にこの論考が置かれている。ニーチェ哲学の解釈をめぐる両者の間には微妙な相違が見られるが、対決するまでには至っていない。すなわち、ハイデガーはニヒリズムの極限形態を形而上学の完成として捉え解釈

し、「形而上学の耐え忍び＝克服」を説くが、西谷はニーチェ哲学を「ニヒリズムの自己克服」として積極的に認め、大乘仏教の「空」の立場を示していると評価する<sup>51</sup>。もとより、これをもってハイデガー哲学と宗教とのかかわりに論及しようとするならば暴論もはなはだしいといわねばならないであろう。しかしここがまさに哲学と宗教との微妙にかかわるところであるといわねばならない<sup>52</sup>。西谷はニーチェ解釈を土台として後年『宗教とは何か』(1961)を刊行する。ハイデガーには積極的に宗教に関与していこうとする姿勢を認めることはできない。しかしその思想が宗教に深くかかわることは、西谷を通して垣間見ることができるようと思われる<sup>53</sup>。

#### 4. おわりに

ハイデガーと宗教との関わりのおおよそをみてきたが、明快な結論を導くことは困難である。しかし、ハイデガーと宗教との関わりのは深さは、まさにハイデガー生来の性格を有するものといって過言ではないであろう。その誕生から死にいたるまでハイデガーにおいて、宗教は、時に見え隠れはするものの太い線としてハイデガーの生涯を貫いている。ハイデガーは確固たる信仰への道から、徹底して思考しようとする思索の道を決然として選び取った。まさに哲学者ハイデガーの誕生である。しかしハイデガー自身、自らについて述懐した一言を聞き漏らしてはならない。「神学によらなければ私は哲学に進むことはなかったであろう」、と<sup>54</sup>。

肝心のそして最大の問題にして条件の一つは、まさにこれこそ、ハイデガーと宗教との関わりに照明を与える光源となるものであるが、それは、その人の持つ宗教的資質あるいは宗教に対する関心の深さということになるであろう。木田元の評価基準がそれを示す。

若き日のハイデガーの作詩に触れるものは余りない。たとえても、これを宗教的立場から読み解こうとするもの、しかもハイデガーの生涯を貫く姿勢の下に見据えようとするものは極めて稀であろう。世に言う《転回》などというものに眼をくませられては到底見透すことのできるものではない。加藤泰時の一書(『ハイデガーとヘルダーリン』)は、ハ

ハイデガー入門であるとともに、またユニークな宗教哲学の書でもある。ハイデガーと宗教との関わりをヘルダーリンの詩とのかかわりを通して解き明かそうとしている。

また、より宗教的な立場から常にハイデガーに接している川原栄峰のハイデガー読解はそれだけ一層ハイデガーと宗教との関わりを深く親しみを込めて迫ることを可能にしてくれる。ハイデガー生誕百年祭に参列した川原は、盛大な墓前祭のさなかに、般若心経をひそかに読誦していたという。そこに何らの違和感を抱かしめることはない。ハイデガーと宗教との関わりを、これまた見事に現象せしめたと言う事ができるのではあるまいか。

しかし、より根本的な問題は、宗教と哲学とのかかわりである。ハイデガー哲学に宗教的なものを読み取るのはよい。しかしそこには截然たる峻別が要請される。日本の思想家ならびに読者はそれに無自覚あるいは、それを晦ましてはならないであろう。ハイデガーと宗教の問題は、現代における知と信のあり方を突きつけている問いでもある。難問に対する対し方のひとつの糸口がここにある。

<sup>1</sup> ズーゾ高校の名称の由来は、ハインリッヒ・ズーゾであり、古典語の教育で知られる。ボーデン湖畔の都市、コンスタンツがかの有名な宗教会議の催されたところであるのは断るまでもない。今日もなおボーデン湖は、その周辺の史跡を始め、また優れた景色によって注目されている。若き日のハイデガー思い出の地として特筆される場所のひとつである。将来、妻となるエルフリーデたちとこの湖畔に過ごした感動をハイデガーは作詩として残している。この作品がハイデガーと宗教とのかかわりを見るにあたって重要な意味をもってくる。また、ハイデガーとヘルダーリンとの結びつきは、ハイデガーの生涯にわたるほど強固であるが、ヘルダーリンとボーデン湖との関わりも深いものがある。これまた断るまでもないが、ボーデン湖は、ドイツ、オーストリア、スイス三国の国境をなしている。また、コンスタンツはライン河の起点に位置している。

<sup>2</sup> ハイデガーは幼少年のころよりスポーツを得意としており、各種の競技を楽しんでいる。このスポーツのし過ぎによる心臓発作であるといわれている。もっとも健康を回復して以後のハイデガーのスキー姿は親しく挿絵において目にする。

<sup>3</sup> 茅野良男「ハイデガー詳細年表」、『現代思想』第7

巻第12号、青土社、1979、参照。

<sup>4</sup> Konrad Graber、父フィリップスの友人。ハイデガーの高校時代の寮の舎監であるが、州の司祭を勤めメスキルヒの出身者の内、その名を知られた一人である。グレーバーがブレンターノの一書をハイデガーに贈った意図は明らかではないが、アリストテレスについてのこの書のハイデガーに与えた影響は余りに大きかった。その後のハイデガーの一生を決定したといっても言い過ぎではない。特にブレンターノと宗教とのかかわりについてというのはカトリック教会との軋轢についてであるが、ことは単純ではないように思われる。<sup>5</sup> Franz Brentano (1838-917)。ドイツの哲学者、心理学者。ブレンターノ学派(独逸学派)の祖の一人であり、心理学においてシュトゥンプ(Carl Stumpf, 1848-936)、価値論においてエーレンフェルス(Christia von Ehrenfels, 1859-932)、現象学としてフッサール(Edmund Husserl, 1859-938)、対象論のマイノック(Alexius Meinong, 1853-920)へと発展した。ブレンターノの出発は本文中にたびたび採り上げている学位論文の主題が示しているように、アリストテレスについての研究であり、またそれに深く関わるトマス・アキナスの中世哲学である。

ブレンターノの説くところは、哲学・心理学もまた学として経験を重んじようとするものであり、表象、判断、情意の三分野にわたるが、第一に重きを置くのは表象であり、心理現象を物的現象から区別する本質的特徴は「対象としてあるものへの関係」すなわち志向的關係である。最初ブレンターノは、表象を内在的なもの(「対象の心的内在」、「内在的对象」と考えていたが、後に、これと切り離し、意識対象の意識からの独立が主張され、実在者のみの表象が可能とされた。ブレンターノ学派は、当時哲学界において優勢であった新カント派に対立するものとして注目された。ハイデガーの卒業論文が心理主義の批判に置かれていたのもこの間の事情を物語る。

本文中、特に宗教とのかかわりについて、ブレンターノと符合すると記した点について一言しておく。

ブレンターノは司教に任ぜられた(1854)が、後に(1873)これを放棄し、カトリック教会と対立するに至った。結婚がその原因であった。もとより、この一件が符合するとみたのではない。宗教とのかかわり方について、信仰によるか、自己自身の信念あるいは意向によるか、その点についての見方を述べたに過ぎない。述べたに過ぎないが、人生観、世界観の上からは極めて重要な意義をもつ。

<sup>6</sup>Heidegger's letter to Engelbert Krebs in early 1919 communicates a crucial life decision in which the two developments are inextricably interlinked. Heidegger justifies his personal conversion to a "free Christianity" on purely philosophical grounds, as a direct consequence of

thinking these grounds through to the end. (*Becoming Heidegger*; *ibid.*,xxi).

<sup>7</sup>Friedrich Ernst Danier Schleiermacher (1768-834)。神学者にして哲学者。幼時より敬虔主義的教育を受けた。ベルリン大学創設に協力、1810年同大学神学教授、また同時に三一教会の説教者として名声を博す。多面的な学問的活動のうち特に宗教哲学的ならびに神学的業績により哲学史上におけるカントに比せられ、近代神学の父としての位置を占めている。宗教の本質は自己自身の体験のうちに、思惟も行為もなく、直感と感情のうちに存する。宗教は宇宙の直感であると規定される。キリスト教の人格神の信仰に立ちながらも、特にスピノザの影響を受け汎神論的傾向が著しい。『キリスト教信仰』において宗教心は絶対依属の感情と規定される。また、哲学は宗教的神学的関心により規定され、存在と思惟ないし存在と観念の世界を神において統合しようとする。観念論的実在論であり、ヘーゲルの純粹思惟の展開とする発出論的傾向に反対した。

<sup>8</sup> *Becoming Heidegger, on the trail of his early occasional writings, 1910-1927*/edited by Theodore Kisiel and Thomas Sheehan, North Western University Press, 2007, p.86.

<sup>9</sup>1910年にヘルダーリンのビンダロスの詩の翻訳、14年に後期讃歌が出版されている。

<sup>10</sup> Rudolf Bultmann (1884-976)。ドイツのプロテスタント神学者。1921年以来マールブルク教授。歴史的・批評的神学から出発し、いわゆる様式史的研究方法を新約聖書の研究に用い、新約学に画期的な業績を残した。さらにハイデガーの影響の下に、非神話化＝実存的解釈を聖書解釈の方法として提唱し、現代的解釈学の確立に多大の貢献をした。ハイデガーの後を追うようにして同年に逝ったのも印象深い。

<sup>11</sup> ブルトマンの演習(1923年から4年かけての冬学期)に参加。また「ヨハネ福音書」を読む研究会に出席。

<sup>12</sup> 1924年に「時間の概念」の演題でマールブルク神学者協会での講演。

<sup>13</sup>木田元『ハイデガーの思想』、岩波新書、2005,45ページ。

<sup>14</sup> 同上。

<sup>15</sup> 同上、46ページ。

<sup>16</sup> 同上、45-6ページ。なお木田の言には適切さがかけている。指摘している期間は、マールブルク時代に当たるが、ハイデガーは、精魂をこめて神学に取り組んでいた。

<sup>17</sup> Karl Barth (1886-968)、ドイツの神学者。始め危機神学 (*Theologie der Krisis*) とよばれていた弁証法神学 (*dialektische Theologie*)を第一次大戦後のヨーロッパの思想的混沌のうちにあつて、Emil Brunner (1889-966)、Friedrich Gogarten (1887-967)、Rudolf Bultmann などと共に創唱。しかし、1930年代初めに早くも、ブルンナー、ゴーガルテンらと袂をわかつて、弁証法神学とか「危

機神学」とよばれるのを嫌うようになった。バルト神学の本旨は、弁証法の論理を操るというのではなく、ただ事実を事実として素直に受け容れるということ、そこに含まれている客観的な規定 (*das Wort Gottes*) または(神の言葉)を、聖書のたすけをかりて、できるだけ明瞭かつ正確に言い表すほかに他意ないものである。この姿勢は、処女作『ロマ書注解』からしてそうであった。バルトは、「偏狭かつ独断的」という世間の非難をおかして、もっぱら積極的かつ客観的な *Die kirchliche Dogmatic* (1932-)『バルト教会教義学』に一身をささげた。実存主義を拒否したのも、その立場からして明白である。

<sup>18</sup>ベルンハルト・ヴェルテ「ハイデッガーを悼む」、『理想』、No.519,理想社、1976,149.ページ参照。

<sup>19</sup> 同上。

<sup>20</sup> 或るものは、キリスト教を拒否していると説き、他のものはこれに依存していると説く(グイード・シュネルベルガー『ハイデガー拾遺』山本尤訳、未知谷、2001,271 ページ参照)。

<sup>21</sup> 手塚富雄『手塚富雄著作集 第五巻』、中央公論社、1981。1953年3月末のハイデガー訪問。

<sup>22</sup> 同上、341ページ。

<sup>23</sup> 同上、342ページ。

<sup>24</sup> ハイデガーは無神論者であるとか、ニヒリストであるとか、極めてネガティブにしかハイデガーを見ようとならないハイデガー観である。『形而上学とは何か』の後語はこの誤解に関連する。

<sup>25</sup> 手塚前出、342ページ。

<sup>26</sup> 「三つの答え」は、昭和二十八年四月から一年半の海外遊学の一結果である。と手塚教授は記した後、「私はこれを読み返すたびに筆者の隠された涙を感ずる」と述懐している(同上、438ページ)。

<sup>27</sup> レーヴィットはまた、「ハイデッガーのこれまでのすべての言説の背後にひそんでいて、多くの人々にきき耳を立てさせ魅了させるものは、言外のもの、すなわち或る宗教的なモチーフである」とも述べている(K.レヴィット『ハイデッガー』杉田泰一、岡崎英輔訳、未来社、1968,208ページ)。

<sup>28</sup> ハインリヒ・オットーの言葉は、ハイデガーを明確に神学者と呼んでいる。「われわれ神学者は哲学者マルティン・ハイデガーにおいて、神学ではめったに到達されなかったような水準・要求・精密さをもった思索に出会う。……いくたの本質的な神学上の発端は、この哲学およびその方法との対決が為されるならば、さらにより深く、より徹底的に、精神をより集中させて問うための励ましを受け取ることが許されるであろう。神学者としてのマルティン・ハイデガーから学ぶのは、……彼と対話しながら「思索の手仕事」における厳密さを修得することによってである。これこそわれわれ

がこの人物に負っているものである。彼の方では彼自身の告白によれば、その個人的な進歩の上で本質的なものをキリスト教との対話に負っているのである」、

(W.ビーメル『ハイデガー』茅野良男監訳、理想社、1986、247 ページ)。

<sup>29</sup> 『ヘラクレイトス・ハイデッガー全集 第55巻』訳者代表辻村誠三、岡田道程、創文社1990、7 ページ。

<sup>30</sup> 『バルメニデス・ハイデッガー全集 第54巻』北島美雪・湯本和雄訳、創文社、1999、11 ページ。

<sup>31</sup> 菅圓吉『現代の宗教哲学』、日本評論社、1934、5-7 ページ。

<sup>32</sup> 加藤泰時『ハイデガーとヘルダーリン』、芸立出版、1985、矯正剤 *Korrektiv* と共同管理の概念は重要、198-9 ページ参照。

<sup>33</sup> 『ヘラクレイトス』前出、16 ページ。

<sup>34</sup> 同上、17 ページ。

<sup>35</sup> 加藤前出、196 ページ。

<sup>36</sup> 同上。

<sup>37</sup> 同上、197 ページ参照。

<sup>38</sup> 同上。

<sup>39</sup> 同上。

<sup>40</sup> ジョセフ・モロー『スピノザの哲学』、竹内良知識、文庫クセジュ、白水社、1973、2 ページ。

<sup>41</sup> 議論の分かれるところである。加藤説に従う(加藤前出、57 ページ以下、および270-71 ページ参照)。

<sup>42</sup> 同上、271、300 ページ参照。

<sup>43</sup> ハイデッガー『形而上学とは何か』大江清志郎譯、理想社、1965、81 ページ。したがって、両者の問答について知ることはない。Wir wissen aber nichts von der Zwiesprache der Dichter und Denker; die “nahe wohnen auf getrentesten Bergen”. (Martin Heidegger, *Was ist Metaphysik?* Neunte Aufgabe, Vittorio Klostermann, 1965, S. 51.

<sup>44</sup> 川原栄峰『ハイデッガー』、南窓社、1992、126-37 ページ参照。

<sup>45</sup> 前出大江訳、62 ページ。Ibid., S. 39-40.

<sup>46</sup> 同上82 ページ参照。また、『理想』No.15,1930,1 ページ以下(清一は後に清志郎と改めた)。

<sup>47</sup> 田辺元「懺悔道としての哲学・死の哲学」、『京都哲学叢書』第三巻、監修上田閑照、編集大峯頭、長谷正當、大橋良介、第三巻編集長谷正當、燈影社、2000、317-8 ページ。

<sup>48</sup> 哲学と宗教をめぐる微妙なところである。田辺の論証が宗教においてなされている点を指摘しておくにとどめる(同上、358-9,364-5,374-5 ページ参照)。

<sup>49</sup> ハイデガーは手稿『哲学への寄与』の執筆を通じて、「存在史的思索」を展開し、その地平からニーチェとの思想的対決をした時期とされている(鹿島徹「西谷啓治とハイデッガー」—ニーチェ解釈をめぐる—、『対話』に立つハイデッガー』、ハイデッガー研究会、

理想社、2000、213 ページ参照)。

<sup>50</sup> 同上。

<sup>51</sup> 同上、214 ページ参照。

<sup>52</sup> カール・レーヴィトは端的に次のように評している、「思索と信仰とを区別したり結合したりするハイデッガーの不即不離な態度は、本質的思索者の思索も本当の信仰者の信仰もともに、存在あるいは神が歴史的に啓示されたり隠れたりすることを知っていると自負するのだからいよいよ紛らわしい魅力をもつことになる」(K.レーヴィト『ハイデッガー』杉田泰一、岡崎英輔訳、未来社、1985、164 ページ)。

<sup>53</sup> 西谷啓治『正法眼蔵講話』、筑摩書房、1987、143 ページなど。

<sup>54</sup> この点についても、本稿は考察の徹底を欠いていると指摘される怖れがないとはいえない。すなわち。ハイデガーの言に拠る限り、神学へ進むことはフライブルク大学進学以後の印象を受ける。しかし、本稿の考察においては、既に高校時代から哲学への並々ならぬ関心を示しており、寄宿舎の舎監をかねていた司祭グレーバーが、ブレンターノの *Dissertation, Von der mannichhaften Bedeutungen des Seienden in Aristoteles*, を贈ったのも、ハイデガーの哲学への関心と才能を見抜いていたからにはほかならないであろう。もともと、神学へ進む、という意味をさらに遡及して、聖職者への道への歩みという観点から捉えることも可能である。その場合は断るまでもなく本稿の趣旨と一致してくる。

(Received: May 31, 2009)

(Issued in internet Edition: July 1, 2009)